

菊地秀行

魔戦記

第2部 八ルハロイ妖戦



KADOKAWA NOVELS

古代超人の魂を受けて、壮絶な魔戦に  
四人の覇者たち。人気絶頂の気鋭が放  
炸裂する超時空伝奇アクション。



ガガパルス

昭和六十一年三月二十五日初版発行

著者 菊地秀行きくぢ ひでゆき

発行者 角川春樹

魔戦記ませんき 第2部 バルバロイ妖戦よらせん

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九三〇八

〒〇三 電話 営業〇三三八八五二 編集〇三一三八八四二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-778802-3 C0293

菊地秀行

魔戦記

第2部 バルバロイ妖戦



KADOKAWA NOVELS

古代超人の魂を受けて、壮絶な魔 古代超人  
四人の覇者たち。人気絶頂の気鋭 四人の覇  
炸裂する超時空伝奇アクション。 炸裂する



# NOVELS KADOKAWA

●作者のことは

角鹿の魔戦は、いよいよその実体を現わそうとしています。

彼の道行きが進むたびに、それはますます

この世ならぬ様相を呈してくるでしょう。

そのとき、草薙は、沙織はどんな役割を果たすのか。

どうぞ、ご期待ください。

どれほど凄まじく見えても、これは人間の物語なのです。

略歴 一九四九年千葉生。青山学院大卒。『魔界都市(新宿)』でデビュー。著書に『魔界行』『妖魔戦線』他。

02-3 C0293 ¥640E

¥640円

東：需要全本請在线购买：





カドカワパルズ

昭和六十一年三月二十五日初版発行

著者 菊地秀行きくちひでゆき

発行者 角川春樹

魔戦記ませんぎ 第2部 バルバロイ妖戦ようせん

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 株式会社多摩文庫

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二二三 振替東京三一九三〇八  
〒一〇三 電話 営業〇三三三八八五二 編集〇三三三八八四五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN 4-04-778802-3 C0293





KADOKAWA NOVELS

---

# 魔戦記

第2部 バルバロイ扶戦

菊地秀行

目次

第一章 大工探し

9

第二章 敵来る

41

第三章 幻都再生

72

第四章 海底魔戦

103

第五章 アレキサンドリアに捧ぐ

130

## 第一章 大工探し

### 1

鳥肉の焦げる匂いは私の胃の腑を音をたてて締め上げた。

「お待ち」

山盛りになった串刺しが大きな皿ごと眼の前に突き出された。茶褐色の肉の表面を濃厚なタレが湯気をたててこぼれおちる。

「どうぞ、社長」

隣席の角鹿荒人がうやうやしく声をかけた。

「うむ」

と言ったきり、私は手を出さなかった。眉が寄っているのがわかる。

眼の前にあるのは焼き鳥だ。

肉もネギも本物である。タレもそうだろう。

しかし、これは、私の意識にある焼き鳥ではなかった。

まず、肉もネギも小さすぎる。焦げ目が黒すぎる。タレが濃すぎる。並べ方が下品だ。皿がかけている。もうひとつ。

眼の前に木の台をはさんで立つ、下品な店主の顔が気に入らない。

「いいかね。角鹿くん——」

と私は不快感を押し殺し、聡明な経営者にふさわしい重い口調で言った。

「焼き鳥というものは、このようなひびの入ったライス用の丸皿ではなく、舟皿に乗せてくるものだ。

肉はこのふた廻りも大きく、当然ひと串三個ではな

く、二個にとどまる。このような黒い焦げの部分など一か所もあつてはならん。肉は全体を狐色程度でとどめ、餡色あんいろのタレでうつつすらと味をつける。料理に必要なのは上品さだよ」

角鹿があわてて何か言おうとしたときは遅かった。

「何ぬかしやがるか、この野郎」

頭上から野蛮な声が降つてくると同時に、脂肪あぶらじみた手がネクタイを掴つかんだ。

ぐいと持ち上げられ、私の頭は屋台の赤ちようちんにぶつかつた。赤い光が激しく揺れる。

「黙つて聞いてりやいい気になりやがって。どこの何様だか知らねえが、焼き鳥屋の店で、焼き鳥の講釈くわくはじめるたあいい度胸だ。おお、表へ出る。お礼に喧嘩けんかの仕方を教えてやらあ」

「失礼だがね、君」

と私は唾つばをとばす分厚い口をにらみながら理性的な口調で言った。

「ここは焼き鳥屋ではない。単なる屋台だ。訂正したまえ」

「こ、こん畜生」

親父が右手をふり上げ、負けじと私も右フックをかますべく身構えたとき――

たくましい手の平が、私の喉のどもとをつかんだ親父の毛むくじゃらの腕に重ねられた。

「まあまあ、小父さん、勘弁してくれ、これ、この通り」

角鹿荒人が苦笑して、眼の前で右手をかざした。

「いいや、ならねえ。あんたは感じがいいが、この唐麥木は――」

「そこを何とか、ね？」

角鹿はウィンクした。

暴力団が改心して店を開いたといったような店主の顔に動揺が走つた。

またか。

我が住川重工明石支社営業部員・角鹿荒人の不可思議な力だった。

親父はあっさりと私のネクタイを解放したのである。

「感謝します」

と角鹿は一礼した。

「いいってことよ」

親父は破顔した。私の方をじろりとにらみ、

「おめえ、ほんとにこの男の社長か——へえ、トンビが鷹を生むとはよく言ったもんだぜ。——あんた、悪いこと言わねえ、職場替えしなさい、職場替え」

「考えておきます」

角鹿の音が終わらぬうちに、私は席を立った。

「社長、どちらへ？」

「不愉快だ、出る」

ふり返りもせず一〇メートルほど歩くと、角鹿が追ってきた。

「相変らず、御気が短いですね」

困った風も、怒った様子もない声に、私は答えなかつた。

「ですが、いちいち街で出される料理にめくじらを立てられていては、社会探訪になりません」

「もう探訪は結構。わしの性には合わん。ホテルへ戻ろうではないか」

私は鼻から思いきり息を吹き出した。今夜の不快感すべてをつめた息は、さぞや毒性を帯びているだろう。

「それは構いませんが、せっかくですからもう一軒ご案内します。曲げてご同行下さい」

この男にこう言われると、もういけない。途方もない目上の人間に下手に出られた気分になって、この私——住川重工社長・草薙建造さえもが、イエスマンになってしまうのだ。

なにしろ、相手は……

「よかろう」

と私は言った。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げて、角鹿は、先に立って細い路地を歩きはじめた。

闇の奥に、ちらほらとネオン・サインがきらめいている。

九州の片田舎では、繁華街といってもまあ、こんなものだろう。

私は右横に眼を向けたが、求菩提山の稜線は、とうの昔に闇に沈んで見えない。

福岡県豊前市求菩提。

観光ルートから遠くはずれたこの山間の僻地には、小倉に本社をもつ『関門土地開発』のホテル建設用地所があり、その工事現場で奇怪な出来事が頻発した。

山を削り森を切り開く大規模な土木作業に必要な

機器を売り込みに出掛けた私たちは、社長の御手洗から契約締結の条件として、その怪異の謎を解くよう提案され、見事、約束を果たした。

さて、これで辺鄙な谷間ともお別れかと喜んだのも束の間、契約達成の立て役者たる角鹿が、しばらくこの地に留まりたいと言い出し、理由もわからぬまま、私と秘書の武田沙織は、不便な工事現場の宿舍で起居をとにもすることになった。

それが四日前の話。

この間、角鹿はひとりで敷地の周囲の谷や森をのぞきにいたり、現場主任の大柳や助手の相沢と何やら話し合ったりしていたが、今日は土曜日ということもあり、何の用もない退屈な生活に飽き飽きした私の誘いに乗って、求菩提山の麓にある小さな町へ降りたのであった。

昼の間、ひとり山歩きに精を出していた武田沙織は、面白い花や昆虫を発見したからと、おかしな理

由をつけて工事現場へ残った。

荒くれ男揃いの現場へ残すのは不安でもあったが、大柳や相沢もいることだし、角鹿も大丈夫だろうと保証するので、渋々置いて出てきた。

ところが、胸はずむ一夜となるはずの社会探訪

——そう言つて角鹿をOKさせたのだが——は、とごとく逆効果に終わった。

町といつても山麓の片田舎である。

飲み屋はわずか二軒、パチンコ屋一軒という体たらくで、ホステスは牛に化粧をさせたような奴らばかり、酒まで水で薄めてあるみたいな気がして、どちらの店も一〇分とおらずに外へ出てしまい、最後に出向いた屋台の焼き鳥屋でも、かくの如き醜態をさらす羽目に陥つたのである。

確かに私は気が短くなつていた。

『関門土地開発』に対して示した私の身分は、住川重工・明石支社の古参営業部員・古川建造なのだ。

工事現場の作業員までが気楽によおよと声をかけていく。

大柳などときた日には同僚扱いだ。

決して不快な態度をとる男たちではなかつたが、それとプライドとは別ものだ。

東京へ戻りたい。

想いは日に日に高まつていた。

「着きました——ここです」

角鹿が立ち停まつたのは、路地の端にある妙に近代的なデザインの白い家の前だった。窓の明りは消えている。

「何だね、これは？ 急に東京へ戻つたか？」

半ば嫌味をこめて言いながら、私は友人かね、と訊いてみた。

「いえ。それどころか、赤の他人です」

「何だ!?」

「ですが、ご懸念には及びません。今日からこの家の主は、私たちの旅になくはならぬ人物に交身するはずです」

何が何やらさっぱりわからず、私は沈黙した。

ほとんど同時に、もうひとつの声がある記憶と知識を元にこう囁く。

——それは、ディアデイスの家だと。

私は門灯を頼りに表札を読んだ。

『出羽春光』

となつてゐる。

止める間もなく、角鹿がベルを押した。留守ではなかったらしく、すぐ脇のインターホンが男の声を吐いた。

「どなた？」

この男、暗黒の家で何をしているのだろう。家族

はいないのか?

「明石から来た住川重工の角鹿と申します」

角鹿は静かに言った。初対面の人物に。

少しためらい、ほうと感心したような声が言った。

「ま、上がんなよ」

「というわけです」

角鹿は私をふり返って言った。

「何が、というわけです、だ。君のやることは到底

私には理解できません」

言いながら、それも当然だという虚無感に私は捉えられていた。

なにしろ、この若者は——

すぐに玄関のドアが開いた。

鍵のはずれる音だけがかすかにして、誰も出てこない。

新種の自動ドアらしかった。

こういう奇をてらった仕掛けを私は好まない。



なにしろ、東京の本社はおろか自宅へも帰れず、福岡の僻地くんだりをうろついているのは、人外のものの手による同様な「仕掛け」のせいなのだ。怒りと恐怖が私の腹をかき回した。

「何だか知らんが、わしは失礼する。君も会ったことのない知り合いのお宅など、夜分に訪問できるものか」

「まあ、そうおっしゃらず」

帰りかける私の両肩を、角鹿はまあまあと言いなから引き戻しつづけた。

「放せ。第一、こんな村に知り合いがいるなど初耳だ」

「ですから、違います。これから知り合いになる相手で」

「しかし」

「いや」

玄関口でぎゃあぎゃあやり合っているところへ、

いきなり、

「いらっしやいませ」

妙なる声がかきこえた。

どれくらいに妙なる声かというところ、私はおろか角鹿まで、瞬時に揉み合う手足を止め、顔を見合わせただけである。

私たちは同時に入口の方を向いた。

ここでごつい男でも立っていれば、意表をついた物語展開なのだが、あいにく、音もなく玄関へ現われ、正座して私たちを迎えたのは、和服姿の女性だった。

それも、そのもつ声にふさわしい――。

透き通った肌に林檎のような健康的な紅を浮かべ、ぱちりと開いた大きな黒瞳で私たちを見つめる顔は、まだうら若いと見えるのに、それ相応の歳月と人生体験を経た大人の潤いを湛えていた。

豪華な和服よりも、私を注目させたのは、全身に